

審査委員長総評

「2021ぐんまの家」の審査を終え、回を重ねる毎に作品の質とレベルが高くなる様を感じました。

社会構造の変化に伴い多様化する住環境に関する課題解決や、県産木材の積極活用による持続的な地域づくりの取り組みなどは、「ぐんまの家」に求められる基本的な要素であると考えます。

今年は「新たな日常」としてテレワークや二地域住居等の対応や「環境への配慮」として維持管理の容易性、長寿命化への工夫等も新たに審査対象といたしました。

一次審査では拮抗する作品の質の高さから選考に悩み、二次審査では選考委員の意見の分かれる場面もありましたが、今年の「ぐんまの家」の「顔」を決めるべく、慎重にかつ十分な議論を重ね、各賞を決定しました。

また、今年は新型コロナウイルスによる感染拡大防止の緊急事態宣言下であったため現地審査が叶わずビデオ撮影による最終審査となったことを付け加えておきます。

最優秀賞に輝いた「本動堂の家」は建築主の職業と住まい方を良く理解し、エントランス廻りの多様な可能性を秘めた建築計画が大変魅力的であります。2つのコートを設けたプランはゾーニングが明確であり機能的でありながらプライベートな空間を切り分け、自然の採光と通風を十分確保することのできる間取りとして高い評価を得ました。また工事費も適正であり周囲の環境にも緩やかに融和する秀作であると言えます。

審査員特別賞の「終の棲家」は大胆な減築と不使用スペースの削除により、原型を見失う程の高い完成度を誇るリノベーション住宅です。住み続けることで得られる幸福感と、地域への愛着を感じる取り組みは社会問題化する空き家対策にも一石を投じる作品であると言えます。

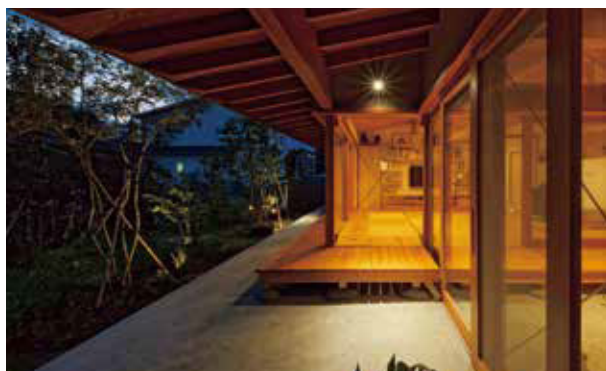
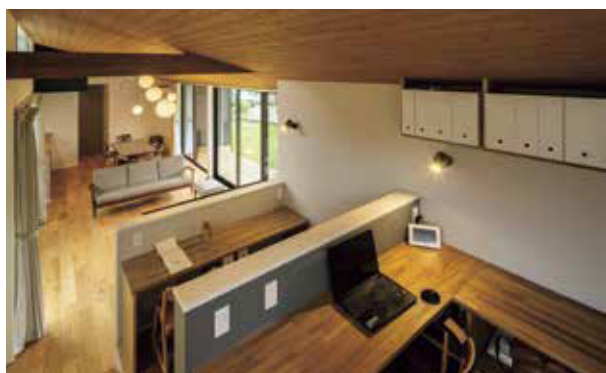
リフォームの域を超えた建築計画は建築主と設計者、施工者の高い信頼関係を伺わせます。

受賞した作品はどれも素晴らしく「家」としての新しい魅力を引き出しながら細部の工夫も見てとれるものでした。

これからも、群馬の気候風土や地域性、県民性などを考慮しながら環境に配慮した住宅が多く生まれることを大いに期待します。

最後に応募された全ての方に敬意を表すると共に、苦しみながらも楽しく審査をさせて頂きましたことに審査員一同、感謝と共に御礼申し上げます。

「2021ぐんまの家」設計・建設コンクール 審査委員長
一般財団法人 群馬県建築士事務所協会 萩原 憲一



審査員
特別賞

GUNMA HOUSING
AWARD 2021

終の棲家

【ついのすみか】

設計者／株式会社 城越設計

施工者／株式会社 城越設計



設計主旨 CONCEPT

桐生市中心街に近いながらも、小高い山を背にする閑静な60坪の敷地。施主は70代のご婦人で、一人暮らし。150cmに満たない小柄な風貌であるが、内に秘めた強い意思がうかがえ、ヒヤリングの度に隠れた思いが表面化してくる。要望の根源的な解決となるリノベーションのコンセプトは、なるべくして出来上がった。

『バイタリティある終の棲家をデザインする』である。コンセプトを実現するための要点は3つ。

1点目は、自然素材を活かすべく全てのバランスを調和させること。1階の間仕切りは全面撤去し、快適な光と風の通りを計画。リビング、キッチンオープンにし、東面・南面に開口部を確保。平面と高さのプロポーション、家具のディテール寸法など細部に渡る。

2点目は、活かすために捨てるデザイン。利用のない暗い玄関は撤去し、階段スペースへと変更、およそ28度の緩やかな勾配の階段を実現させた。2階の個室をインナーバルコニーに変更し、寝室の前に配置。内と外の中間領域となり、体感的な落ち着きをもたらすと共に、夏の日射遮蔽にも有効的となる。不必要な個室

は全て取り壊し屋根裏とした。

3点目は、住みながらの大規模なリノベーションである。キッチン、トイレ、浴室の水廻りを全て移動する計画とした。施工において、工区分けが可能となり、A工区に新規浴室を造作→その後、B工区の既存の浴室を解体→そこに新たにキッチンを造作→C工区の既存キッチンを解体し、仏間へ変更。といった風である。これで、工事中に水廻りが使えない問題が解消された。

最後に、騒音や振動、第三者（職人）の出入り等、改修工事の難しさを緩和すべく、施主の仕事場であるアトリエは、一切手をつけなかったこととした。織物産業が盛んな桐生で生まれ育った施主は、ひたすらミシンと向き合う洋裁を仕事にしてきたという。そんな彼女の心臓部であるアトリエをしっかりと守りながら、工事は完成を迎えることができた。完成後も何う度に、元気な笑顔を見せてくれる。聞けば、庭を掘り起こして小さな家庭菜園を始めたとの事。終活という言葉が浸透する現代だが、終の棲家は決してひっそりと籠るものではない。アクティブにエネルギーがあるべきと考える。

平面図



講評 REVIEW

閑静な街区に佇む住宅の持ち主は、お一人で生活される70代のご婦人。

住み続けた住居をこれからの時代と暮らし方の変化に順応させるべく大胆なリノベーションにより多くの問題点を解決しました。また、住みながらの大規模な工事は工区分けをし、生活に必要な水廻りを機能移転させながら維持させることで、実に1年半にも及ぶ工事となりました。

建築主の依頼と要望を様々な制約の下で具現化した設計と施工は、大変なエネルギーの伴う作業であったと伺えます。それは建築主との高い信頼関係により実現することとなりました。

活かすために捨てるデザインを徹底し、自然素材を多用した豊かな内部空間は家主の五感に響くプロポーションとなり、大胆な減築により生まれ変わった外観は正対する桜並木と呼応し、あたかも従前からその場に在ったかのような佇まいを見せてくれます。

暮らし方、住まい方の優良事例として。また、既存住宅の長寿命化やロングライフ化の成功例として、優れた取り組みに対し審査員特別賞を授与いたします。

